

そうせきざんぼう
漱石山房の秋

あくたがわりゆうのすけ
芥川龍之介

夜寒よひさむの細い往来つぎを爪先つまさき上がりあがりに上あっていくと、古ふるぼけた板屋根いたやねの門かどの前まへへ出る。門かどには電灯でんとうがともっているが、柱はしらに掲かかげた標札ひょうさのごときは、ほとんど有あり無なきさえも判然はんぜんしない。門かどをくぐると砂利じやりが敷しいてあつて、そのまま砂利じやりの上うへには庭木にわぎの落ち葉おちばが紛々ふんぶんとして乱みだれている。

砂利じやりと落ち葉おちばとを踏ふんで玄関げんかんへ来きると、これもまた古ふるぼけた格子戸こうしのほかは、壁かべといわず壁板したみといわず、ことごとくつたに覆おおわれている。だから案内あんいを請こおうと思おもったら、まずそのつたの枯かれ葉はをがさつかせて、呼鈴べルのボタンボタンを探たづねばならぬ。それでもやっと呼鈴べルを押おすと、明あかりのさして

* 夜寒 夜の寒さ。秋が深まって、夜の寒さを身を感じることに。

* 往来 道路。

* 爪先上がり 少しずつ登りになること。

* 板屋根 板でふいた屋根。

* 紛々として 入り乱れてまとまりのないさま。

* 格子戸 細い角材や竹などを、碁盤の目のように組み合わせで作った戸。

* 壁板 横板を張る壁。上の板の下端を下したの板の上端うへに少し重ねて取り付ける。

* 呼鈴 人を呼んだり、合図したりするために鳴らすベル。

いる障子が開いて、束髪に結った女中が一人、すぐに格子戸の掛け金を外してくれる。

狭い三畳の玄関には、泰山の金剛経の石刷りを貼った、二枚折りの屏風が立っている。ここに帽子や外とうがなかったら、まず先客はいないものと思つてさしつかえない。

玄関から右手の廊下へ出ると、唐めいた欄干の続いた外には、もう秋風に裂けた芭蕉の葉が、ばさと星月夜の空を払っている。昼見るとその芭蕉の下には、霜にめげない木賊の色が一面に庭をうずめているが、客間

*束髪 髪を束ねて結う髪型。

*掛け金 戸や箱などに取り付け、もう一方の金具に掛けて開かないようにする金具。

*泰山の金剛経の石刷り 中国山東省の泰山にある石碑の拓本。

*屏風 室内に立てて風をさえぎったり、仕切りや装飾に用いたりする調度。

*外とう コート。

*唐めく 唐ふう。異国ふう。

*欄干 橋や縁側の縁に、人が落ちないように渡した手すり。

*芭蕉 バシヨウ科の多年草。

*星月夜 星の光が月のように明るい夜。

*木賊 トクサ科の常緑性シダ。北海道から本州中部の湿地に自生する。

の硝子戸ガラスをもれる電灯の光も、今はそこまでは照らしていない。いや、その光がさしているだけに、向こうの軒先のきぎきにつるした風鐸ふうたくの影も、かえって濃こくなった宵闇よいやみの中に隠かくされているくらいである。

硝子戸から客間をのぞいてみると、雨もりのあととねずみの食った穴とが、白い紙張りの天井てんじょうに斑々はんぱんとまだ残っている。が、十畳じゅうじょうの座敷ざしきには、赤い五羽鶴ごわづるの毯たんが敷いてあるから、畳たたみの古びだけは分明ぶんめいでない。この客間の西側せいせ（玄関より）には、更紗せいらいせの唐紙たがみが二枚あって、その一枚の上に古色を帯びた壁かけが一つ下がっている。麻あしの地に黄色にゆりのような花をぬいとったのは、津田青楓つだせいふう氏か何かの図案らしい。この唐紙たがみの左右の壁かべぎわには、あまり上等でない硝子戸の本箱ほんばこがあって、その何段かの棚たなの上にはぎっしり洋書が詰つままっている。それから廊下に接した南側には、殺風景な鉄格子の西洋窓の前に大きな紫檀したんの机をすえて、その上にすずりや筆立

* 風鐸 仏堂や仏塔の軒の四隅などにつるす青銅製の鐘形の鈴。

* 座敷 畳を敷きつめた部屋。

* 五羽鶴の毯 五羽の鶴をあしらったじゅうたん。

* 分明 明らか。

* 更紗 主に木綿もめん地に、模様を染めたもの。

* 唐紙 中国から渡来した紙。厚手の紙が、襖障子ふすまぢょうしに用いられた。

* 津田青楓 「一八八〇—一九七八」 画家。夏目漱石の本ほんの装丁そうていも手がけた。

* 紫檀 マメ科の常緑小高木。家具材として重用される。

てが、紙絹しけんの類たぐいや法帖ほうじょうと一緒いっしょに、存外行儀ぞんがいぎよく並べてある。その窓をあ
ました南側の壁と向こうの北側の壁とには、ほとんど軸じくのかかっていな
ったことがない。蔵沢ぞうたくの墨竹ぼくちくが黄興こうこうの「文章千古事ぶんしやうせんこのこと」と挨拶あいさつをしてい
ることもある。木庵もくあんの「花開万国春はなひらくばんこくのはる」が呉昌蹟ごしょうせきのもくれんと鉢合はちあわせをしてい
ることもある。が、客間かまを飾かっている書画は独りこれらの軸ばかりではな
い。西側の壁には安井曾太郎やすいそうたろうの油絵の風景画が、東側の壁には齋藤与里さいとうより

* 紙絹 絵をかくための紙と絹布けんぶ。

* 法帖 先人の筆跡を模写または拓本に取り、折り本に仕立てたもの。

* 存外 予想外。案外。

* 軸 書画の掛け軸。

* 蔵沢の墨竹 江戸後期の画家・吉田蔵沢が描いた墨竹図。漱石は入院中
に見舞いに訪れた森円月もりえんげつからもらった。

* 黄興 「一八七四―一九一六」 中国の政治家。辛亥革命しんがいに参加した。

* 文章千古事 文章は永遠の命を保つということ。

* 木庵 江戸前期に來日した中国の僧。

* 花開万国春 一輪の花が天下に春の訪れを知らせるといこと。

* 呉昌蹟 「一八四四―一九二七」 中国の清朝末期から近代にかけて活
躍した画家。

* 安井曾太郎 「一八八八―一九五五」 洋画家。

* 齋藤与里 「一八八五―一九五九」 洋画家。

氏の油絵の草花が、そうしてまた北側の壁には明月禅師の無絃琴という草書の横物が、いずれも額になってかかっている。その額の下や軸の前に、あるいは銅瓶どうへいに梅もどきが、あるいは青磁せいじに菊きくの花がその時々で投げこんであるのは、むろん奥おくさんの風流に相違さういあるまい。

もし先客がなかったなら、この客間をのぞいた目をさらに次の間へ転じなければならぬ。次の間といっても客間の東側には、唐紙も何もないのだから、実は一つ座敷も同じことである。ただここは板敷きで、中央に広げたほう一間いっけんあまりの古絨毯ふるじゅうたんのほかには、一枚の畳も敷いてはない。そうして東と北の二方の壁にほうには、新古和漢洋の書物を詰めた、むやみに大きな書棚が並んでいる。書物はそれでも詰まりきららないのか、じかに下の床ゆかの上へ積んである数も少くない。そのうえやはり南側の窓ぎわに置いた机の上にも、軸だの法帖だの画集だのが雑然とうずたかく盛り上がっている。だから中央に敷いた古絨毯も、四方に並べてある書物のおかげで、はでなすべき赤い色わずが僅かばかりしか見えていない。しかもそのまん中には小さ

* 明月禅師 「一七二七—一七九七」 書の達人として知られた僧。

* 無絃琴 糸のない琴。

* 横物 横に長く書かれた書画。

* 銅瓶 銅製の湯わかし。

* 梅もどき モチノキ科の落葉低木。実は熟すと赤くなる。

* 青磁 青緑色の釉うわぐすりのかかった磁器。

* 一間 「間」は約一・八二メートル。

い紫檀の机があつて、そのまた机の向こうには座布団が二枚重ねてある。銅印どういんが一つ、石印せきいんが二つ三つ、ペン皿に代えた竹の茶筴ちやぎ、その中の万年筆、それから玉ぎよくの文鎮ぶんちんを置いた一つづりの原稿用紙げんこう——机の上にはこのほかに老眼鏡ろうがんきょうが載せてあることも珍めづしくない。その真上には電灯でんとうが煌々こうこうと光を放っている。傍らかたわには瀬戸火鉢せとひばちの鉄瓶てつびんが虫のなくようにたぎっている。もし夜寒よなだが甚はなしければ、少し離れたガス暖炉だんろにも赤々と火が動いている。そうしてその机の後ろ、二枚重ねた座布団の上には、どこか獅子ししを思しわせる、背せの低い半白はんぱくの老人らうじんが、あるいは手紙の筆を走らせたり、あるいは

* 銅印 銅で作った印鑑。

* 石印 石で作った印鑑。

* 茶筴 茶葉をすくうさじ。

* 玉 色、光沢の美しい石。

* 煌々 光輝くさま。

* 瀬戸火鉢 瀬戸物でできた火鉢。

* 鉄瓶 鑄鉄製の湯わかし具。

* 甚しい 非常に。度を越えている。

* 獅子 ライオン。

* 半白 白髪が半分まじっていること。

唐本の詩集を翻ひるがえしたりしながら、端然たんぜんと独り座っている。……
漱石山房の秋の夜は、こういう蕭条しょうじょうたるものであった。

* 唐本 中国から渡来した書物。

* 翻す 裏返す。

* 端然 姿勢などがきちんとしているさま。

* 蕭条 ひっそりともさびの寂しいさま。

芥川龍之介「一八九二—一九二七」

東京都に生まれた。小説家。作品に『芋粥いもがゆ』『地獄変じごくへん』『蜜柑みかん』『河童かっぱ』などが
ある。

《出典》『芥川龍之介全集 第五卷』によった。